総　　説

鳴梁海戦に関する文献総覧：海戦の実相を求めて

Toward better understanding of the battle of Myeongnyang: Review of Literature

環太平洋大学名誉教授
小川　隆章
OGAWA, Takaaki
Emeritus Professor
International Pacific University

要旨：豊臣秀吉による２度目の朝鮮出兵（慶長の役，丁酉再乱）のとき，朝鮮半島南西部の鳴梁海峡での朝鮮水軍と日本水軍との戦いは鳴梁海戦あるいは鳴梁渡海戦と呼ばれる。李舜臣率いる朝鮮水軍は地形と潮流を巧みに生かして，わずか13隻ほどの軍船を持って日本の大軍を敗走させ大勝利を挙げたといわれる。日本の歴史家の著書でも，「日本水軍は総崩れ」，「日本水軍の西進がくじかれ，制海権は朝鮮側が保持した」との記述が多い。本稿では韓国および日本の歴史家および著述家の鳴梁海戦に関する参照可能な種々の文献を総覧した。その結果，李舜臣の日記および捕虜となった両班，姜沆の「看羊録」および鄭希得の「月峰海上録」の記述を根拠として，朝鮮水軍は日本水軍の先鋒に局部的勝利を得たが，いち早く戦場を離脱し制海権を放棄し，日本水軍が全羅道西岸へ侵攻したことが明らかであり，大局的には日本水軍の勝利であったことを論証した。

キーワード：鳴梁，李舜臣，文禄・慶長の役，水軍

Abstract：In the battle of Myeongnyang, on October 1597, the Korean navy, led by Admiral Yi Sun-sin, fought the Japanese navy in the Myeongnyang Strait, near Jindo Island, off the southwest corner of the Korean peninsula.

In this paper we reviewed literature concerning this battle. Almost all Korean and Japanese historians and writers wrote that Korean navy had gotten brilliant tactic victory, and had pushed back Japanese navy. We checked two gentlemen's books.『Ganyangrok』written by Gang Hang, and『Wolbong haesangrok』written by Jeong Hui-deuk. The authors of two books tell us that they saw a number of Japanese war ships and were caught by Japanese navy at west coast of Cholla province just after the battle. These facts show us that Korean navy did not push back Japanese navy at Myeongnyang. And admiral Yi's diary reports that he withdrew to north end of Cholla province from the strait. Therefore we conclude that admiral Yi Sun-sin got tactical victory to the vanguard of Japanese navy, and Japanese navy got general strategic victory at this battle.

Keywords：myeongnyang, naval battle, Yi Sun-sin, Imjin war

Ⅰ・本稿の主題

筆者は前稿（小川，2021）において，文禄・慶長の役における稷山の戦いについて考察をおこなった。韓国の歴史教科書では，陸上での稷山の戦いと並んで，海上での戦いとして重要な「鳴梁の戦い」を戦局の転換点として記述している。

朝鮮半島南西部の珍島と対岸の本土との狭い海峡が鳴梁あるいは鳴梁渡と呼ばれる水路である。旧暦の１日と15日前後の数日間，潮流の流れが一日４回変化するという。その落差は実に７～８ｍにも及ぶという。そのとき海が鳴く。それで鳴梁と呼ばれるという（片野，1996，p.242）。慶長２年９月16日，明暦では万暦25年，グレゴリオ暦1597年10月26日，李舜臣率いる朝鮮水軍と日本の藤堂高虎ほかの大名が率いる水軍との戦いが行われた。前稿で引用した韓国歴史教科書の記述をもう一度見てみると，

韓国教育部編（2003）大槻健ほか訳『世界の教科書シリーズ１新版・韓国の歴史「国定韓国高等学校歴史教科書」』（明石書店）に，

「３年間にわたった会談は決裂し，再び倭軍は侵入してきた。これにたいして朝鮮軍と明軍は稷山で防ぎ，南方へ撃退した。このとき李舜臣は倭軍を鳴梁へ誘導して一大反撃を加え，大勝利を収めた。陸地と海で再び惨敗を喫した倭軍は，次第に戦意を喪失して敗走を始めた。朝鮮水軍は逃走する倭船数百隻を露梁の沖でさえぎり，最後の一撃を加えた。李舜臣はこの最後の尖戦闘で壮烈な戦死を遂げた露梁大勝を最後に７年間にわたった戦乱は終わりを告げた。」（p.212）

イ・インソクほか（2013）『世界の教科書シリーズ（39）検定版・韓国の歴史教科書「高等学校韓国史」』明石書店

「日本は休戦交渉が決裂すると再び攻撃を始めた（1597・丁酉再乱）。朝鮮と明の連合軍は稷山で日本軍の北上を防いで南に押し出し，李舜臣は鳴梁海戦で大きな勝利をおさめた。戦況が不利になった倭軍は，豊臣秀吉が死ぬと日本に撤収した」（p.84）

最後に，宋讃燮・洪淳権・著（2004）「韓国放送通信大学校歴史教科書」明石書店（p.204）では，朝鮮王朝時代の学者李酔光『芝峰類説』の文章を「水軍の戦力」と題して，

「わが国の戦艦は非常に素晴らしい。人々は“倭船数十隻がわが戦艦の１隻にもおよばない”という。李舜臣が全羅左水使になった時，知恵を絞って新しい船を造った。上に板で蓋を作って被せたので，格好が亀が伏せたようである。だから亀甲船という。壬辰の年に，これを使用して勝利を収めたが，亀甲船が戦略上優秀なものを備えていたので助かった。しかし，元均が李舜臣に代わり左水使になって，百余隻の戦艦が撃破され，残り少なくなった。李舜臣が元均に代わって再び左水使になって，戦艦13隻で海いっぱいに覆った600余隻の敵船を撃破した。やはり将軍には素晴らしい人を戴かないとだめだ」と引用している。なんと，ここでは李舜臣が13隻の船で600余隻の日本水軍を撃破したのだという。

韓国では客観的な鳴梁海戦という名称でなく，「鳴梁大捷」，ローマ字で書くと，myeongnyang daechop と表記される。朝鮮水軍の大勝利であることを前提とした名称だ。韓国のテレビドラマで「不滅の李舜臣」2004年９月～翌年８月に放映された中で，第95話と96話が鳴梁の場面であった。また，2014年に公開の韓国映画「鳴梁」（日本語版では「バトル・オーシャン，海上決戦」，英語版では「Admiral: Roaring Currents」）が空前の大ヒットをした。鳴梁の戦いがクライマックス場面であった。

日本の「日本歴史大事典第３巻」（2001，小学館）の「文禄・慶長の役」の項目の中に記述されている。執筆者は北島万次である。第二次侵攻の主要な戦いを列挙する中で，

「④同年９月，八月の南原の戦に参戦した藤堂高虎らは水軍を率いて全羅道南岸を回り，珍島に向かった。これにたいして李舜臣は13隻の船（さきの巨済島の海戦で朝鮮水軍は多くの船を失った）をもって133隻を鳴梁海峡に迎え撃ち，日本水軍を破った。」と記す。

また，伊藤亜人ほか監修『新版・韓国・朝鮮を知る事典』（平凡社，2014）では「壬辰・丁酉倭乱」の項目を矢沢康祐が執筆している。本文に鳴梁海戦の名はでてこないが，関連年表に「1597・９－日本海軍，李舜臣に大敗」と記している。

一方，日本語のwikipedia「鳴梁海戦」では，これらの記述と大きく異なり，

「李舜臣の指揮する朝鮮水軍が日本水軍の先鋒を撃破したが，日本水軍本隊の攻勢を支えきれず，不利な戦闘を避けて撤退した。この結果，朝鮮水軍は非主力艦や根拠地，制海権を失い，唐笥島，於外島，七山島，法聖浦，蝟島を経由し北方の古群山島付近まで後退した。この後，朝鮮水軍は日本の陸軍と水軍の撤退まで再進出できなかった。」と記述している。

本稿では鳴梁海戦は韓国歴史教科書の記述の通り，李舜臣の大勝利なのか，どうなのか，この海戦の実相に迫るべく，入手可能な文献を網羅して収集し，検討してみたい。

Ⅱ・鳴梁海戦を記述する文献

朝鮮側の基本資料である朝鮮王朝実録（宣祖修正実録　宣祖30年９月）では，

「統制使李舜臣，賊を珍島碧波亭下に破り，其の将馬多時を殺す。舜臣，珍島に至り，兵船を収拾し，十余艘を得る。時に沿岸士民の乗船避乱する者，舜臣の至るを聞き，喜悦せざるはなし。舜臣，道を分けて招集し，軍後にありて，以て兵勢を助けしむ。賊将馬多時，水戦を善くすと号（きこ）ゆ。其の船２百余艘を率い，西海を犯さんと欲し，碧波亭下に相遇す。舜臣，十二船を以て，大砲を載せ，潮に乗じ順流に至りてこれを攻む。賊敗走し，軍声大いに振るう」

このときの領議政（総理大臣）だった柳成龍が書いた『懲毖録』では58章「李舜臣がまた活躍する」として，

「統制使李舜臣が珍島の碧波亭の下で倭兵を打ち破り，

其の将馬多時を殺した。李舜臣は，珍島に到着し，兵船を収拾して，十余艘を得た。この頃，沿岸の人で船に乗って乱を避ける者が無数いたが，舜臣がやってきたと聞いて大喜びしない者はいなかった。舜臣が各方面から（難民を）招き寄せたところ，遠近を問わず集まったので，軍の背後に置いて陰の力にさせた。賊将馬多時は水戦を善くするといわれていたが，その船二百余艘を率いて西海に侵入しようとして，碧波亭下でわが水軍と遭遇した。舜臣は，十二船に大砲を載せ潮流に順ってこれを攻めた。賊は敗走し，李舜臣の軍事的名声は大いに振るった。」

この両文は類似しているが，両者とも日本水軍の大将馬多時が戦死し，日本側は総崩れになったかのように読める。あたかも織田信長が少数の軍勢で，大軍を率いる今川義元を討ち取った桶狭間合戦のような感じだ。

朝鮮水軍を指揮した李舜臣の『乱中日記３巻』（北島万次・訳）（p.47-50）の９月16日の日記は，

「十六日，甲辰，晴。早朝，別望からの報告によると，無数の倭賊の船が鳴梁に入り，まっすぐに我が集結点に向かっている，という。ただちに諸船に碇を挙げて海にでよと指令したが，倭賊の船百三十余隻が我が諸船を取り囲んだ。諸将らはその勢いに衆寡敵せずと思い込み，戦いを回避しようとした。全羅右水使金憶秋の乗る船はすでに二馬場ほど離れてしまった。自分は櫓を促して突き進み，地字銃筒・玄字銃筒などの火砲を風雷の如く乱放し，軍官らは船上に立ち並んで矢を雨の如く乱射した。倭賊は対抗することもできず，一進一退していた。賊船は幾重にも取り囲んでおり，勝敗の行方は定め難くなった。船中の軍士らは顔を見合わせ色を失ったが，自分は穏やかに，“賊船は数こそ多けれども，我が船を直撃できない。少しも動揺することなく，さらに心力を尽くして賊を撃ちまくるのだ”と言い聞かせた。諸将の船を顧みると，すでに遥か彼方に退いていた。引き返せとの軍令を出そうとすれば，倭賊は我が船の退くのに乗じて，接近するので，進退に窮することになる。それ故，角笛を吹き，中軍に命令を下す旗をたて，さらに招揺旗を立てたところ，中軍将弥助項僉使金応誠の船が少しずつ我が船に近づき，巨済州県令安衛の船が真っ先に到着した。自分は船上に立ち，みずから安衛に“安衛よ，軍法に死なんと欲するか。逃げてどこで生きようとするのか”と叫ぶと，安衛はがむしゃらに賊船団に突入した。さらに金応誠に叫んだ。“汝は中軍将でありながら，遠くに避けて大将を救わず，その罪は逃げられぬぞ。処刑すべきところであるが，今は賊勢が急であり，戦功を立てる猶予を与えよう”。両船が先駆けしたさい，賊将の乗る船が配下の船二隻に指図し，一斉に安衛の船に群がりついて，争って船べりに攀じ登ってきた。安衛と船上の軍士は各々死力をつくし，あるいは稜杖を持ち，あるいは長槍を握り，ほとんど力尽きるまでになった。自分の船は船首を回らして突入し，矢を雨の如く乱射した。三船の倭賊はほとんどみな倒れ伏した。鹿島万戸宋汝宗。平山浦代将丁応斗の船がつづいて進み，力を合わせて乱射し，身を動かす倭賊は一人もいなくなった。俊沙という名の降倭は安骨浦の賊陣の投降者である。我が船上にいて俯視していたが，“文様つきの紅錦衣を着て居るものは安骨浦の賊将馬多時である”と云った。自分は無上の金石孫に命じて鉤を使ってその賊将を船首に釣り上げさせた。そこで俊沙は勇躍し“これは馬多時である”と云った。それ故，直ちに寸断させた。倭賊の気勢は大いに挫け，諸船は敵がもはや侵攻できないと知ると，我が水軍は一斉に勝鬨を挙げ，斉進して各々地字銃筒や玄字銃筒を放った。砲声は河岳を震わせ，雨の如く矢を放ち，賊船31隻を撃破した。賊船は退避し，これ以上近づこうとしなかった。我が水軍は戦海に停泊しようとしたが，潮流が極めて厳しく，風も逆風，後援なく孤立した状況にあった。そこで唐笥島に移泊して夜を過ごした。これはまことに天の幸いであった」となっていて，諸書に引用される。

一方，これと対比して，日本側の水軍の将の一人藤堂高虎の記録「高山公実録」では，

「御帰陣被成候ちとまへかとに，こもかいへ御こしなされ候処にすいえんと申所にはん舟大しやう分十三そういい申候，大川のせよりしほのさし引御さ候所の内にちとしほのやハらかき申候所に十三のふねい申候，それを見附，是非ともとり可申よし，舟手衆と御相談にて，則御取懸被成候，大舟にてハいまのせとをこきくたし候儀ハなるましきとて，いつれもせきふねを御そろへ被成，御かかり被成候，さき手のふねともハ敵船にあひ手負あまたいてき申候，中にも来島出雲殿うちしにこにて御ざ候，其外ふね手の衆めしつれられ候，かろうのもの共もくわはん手負討死仕候処に毛利民部大夫殿せきふねにて，はんふねへ御かかり被成候，はん船へ十文字のかまを御かけ候処にはん船より弓鉄砲はけしくうち申候に付，船をはなれ海へ御はいりなされあやうく候処に，藤堂平八郎，藤堂勘解由両人船をよせ，敵船とおいのけ，たすけ申候，朝の五しふんより酉の刻まで御合戦にて御座候，みなとのやうす，はん

船能存候に付，風を能見すまし，其せと口をぬけ，ほをひきかけ，はしらせ申につきて，是非なくおつかけ申儀もまかりならず，いつみ様も手を二か所おはれ候」
と記述され，当日の日本側の記録としてよく引用される。

戦前の文献としては，参謀本部編の戦史，徳富蘇峰の近世日本国民史，有馬成甫の朝鮮役水軍史，朝鮮総督府による朝鮮史編修会が編纂した朝鮮史などに鳴梁海戦の記述が見られる。

参謀本部『日本戦史・朝鮮役』（1924）（p.368-369）および朝鮮史編修会（1937）『朝鮮史第四編第十巻』（p.718）の記述には，日本側の水軍の武将の名が明記されていることを除けば，ほとんど朝鮮王朝実録の記述と大差ない。後者の編修委員は総督府が委嘱した日本人学者と地元の学者である。

徳富蘇峰『近世日本国民史　9　朝鮮役下巻』は大正年間に執筆されたようであるが，今参照できるのは昭和39年出版のものだった。「六七　李舜臣再び起用せらる」（p.399）には，当日の李舜臣の日記の全文を引用して，
「是れ李舜臣の自ら書する所。或いは若干の懸値ありとするも，決して無限の事ではあるまい。」
と述べる。李舜臣の記述するところでほぼ間違いなかろう，ということだ。

同じように述べているのが有馬成甫（1942）『朝鮮役水軍史』だ。
「この戦闘の模様は李舜臣の乱中日記以外には纏まった資料がない。依て左に全文を引照する」（p.256）として９月16日の日記を引用。261ページに，
「日本戦史には加藤嘉明も参加したことになっている。然し彼は陸戦に従事して８月24日に全州を陥れて感状をもらっているから此海戦に参加したとは常識上解せられない。其他脇坂，藤堂，菅等の水軍が果たして参加したか否やは何等徴すべきものがない」と，本戦役の日本側文書を参照していないことが明白である。
「以上の如く本海戦の詳細を詳らかにすることはできないが，本海戦の戦果に至っては甚だ明瞭である。我が水軍は遂に西進してその北方に出づることができなかった。この一事は決定的な戦果であった」

有馬は次の節で，「鳴梁渡の海戦に勝利を得た李舜臣は唐笥島－法聖浦－古群山島－外島－発音島等を往復して付近海面を遊弋して警備に任じた」（p.262）と記述しているが，海戦当日，李舜臣は日本水軍の先鋒の中型船群に痛打を与えて武将の一人も討ち取っているが，日本軍が怯んで攻めかからない間に先に北方へと戦場を離脱して唐笥島まで行っている。翌日翌々日はさらに北方へ移動し，最終的には全羅道の北端の古群山島まで陣を移した，と日記で述べている。「遊弋して警備に任じた」と有馬は表現したが，意地の悪い言い方をすれば，「日本水軍の追撃を避けて逃げ回った」とも言えなくもないだろう。

韓国人の執筆したものは一貫して李舜臣の大勝利とするものである。

李ヒョンソクは前稿で言及したとおり，大著『壬辰戦乱史・上中下３巻』を著し比較的客観的にこの戦役を記述している。鳴梁海戦について『中巻』（1977）（p.652）で11ページを割いて詳述している。主として乱中日記による記述であるが，
「日本の軍船３隻が，安衛の船を囲み船上に乗り移ったので，安衛以下軍兵は乱戦乱闘を繰り広げ，こん棒・長槍・太刀・水磨石の塊などの白兵戦を展開した。李舜臣は直ちに救援を命じ，銃筒と弓矢で包囲中の日本船を集中攻撃したので，甲板に斃れる者，悲鳴を上げて櫓に攀じ登る者，腕が折れ，首が飛ぶ者など，阿鼻叫喚の地獄絵図となり，遂に日本軍船３隻は炎上した。この時，鹿島万戸宋汝宗と平山浦代将丁応斗の２兵船が舳先を列ねて来航し，協力して敵を射斃した。他の軍船も飛鳥のように進退しつつ，砲火を浴びせ，海水も煮え沸る激しさであった…」のように生き生きと戦闘場面を描いている。「この日，士民らは右水営の裏山に登って遠く海戦をのぞみながら，はらはらしていた。」人々は心配していたが，李舜臣の大勝利を見て狂喜したという。「朝鮮水軍は，唐笥島へ航進して布陣し，日本水軍は熊川方面へ退却してしまった」と記述。日本水軍が退却したのなら，なぜ李舜臣は北方へと移動する必要があったのか，疑問が残る。

金熙明（1972）は『日本の三大朝鮮侵略史』の中で，
「16日の朝，133隻の日本船隊は，順潮に乗って於蘭浦を離れ，鳴梁にいる李舜臣船団を猛撃してきた。二重，三重に12隻の軍船を包囲したが，彼は鳴梁海峡の干潮を利用して，31隻の船隊を撃破する好運に恵まれた。鳴梁海峡は，潮流が時間的に順潮から逆潮に急変するので，日本船団は李舜臣の作戦に引っかかって，自滅せざるを得なかったのだ。このとき，来島通総が戦死した。この鳴梁海戦で，さきに元均が敗戦してこのかた，初めて制海権を取り戻し，日本水軍の西進を阻んだ」

金竜煥（1979）『亀甲船海戦記－海の覇者・李舜臣将軍－』では乱中日記の当日の李舜臣の日記の全文を引用し，

「日本軍の藤堂高虎は重傷を負い，軍監・毛利高政は海に落ちて溺死寸前に助かり，来島のほか波多信時ら数十将が討たれ，残った日本水軍は西進を諦め，全部熊浦に引き上げた。」（p.248）

金奉絃（1995）『秀吉の朝鮮侵略と義兵闘争』（p.341）

「決戦は16日の払暁に決行された。まず順潮に乗った日本水軍の艦隊が於蘭浦を離れ，珍島と海南の間の鳴梁の水路に近づいたとき，ちょうど潮流が止まった。その直後，潮流が順潮から逆潮に急変した。日本水軍は船隊を乱した。李舜臣はこの瞬間を狙った。朝鮮の水軍将金応緘と安衛らは，敵の包囲網をくぐって敵艦の脇腹へ激突させ，三隻を撃沈させ，敵将馬多時を打倒し，引き続き31隻を撃破した。すると残敵は算を乱して四散した。このように李舜臣が連戦連勝したのは，部下の意見に耳を傾け，用兵・用船・戦術を巧みに実行したからにほかならない。日本水軍は来島が戦死し，藤堂も負傷し，指揮船を撃破されて，散々に大敗し，制海権を失った。この鳴梁海戦の快勝で，元均が失った全羅道海域の制海権を取り戻し，以後，日本水軍に，西進の野望を完全に捨てさせた」

金在瑾（2001）『亀船』（p.56）では，

「鳴梁海戦は，元均が漆川梁海戦で戦死したのち統制使に再任された李舜臣が，やっと残った12隻の軍船だけで日本の大艦隊に向かい，奇跡的勝利をおさめた海戦であった。李舜臣は白衣従軍している間に統制使の大任を受け，軍船と軍士を集めて碧波津に立ち寄った。碧波津は珍島の東北端に位置して海南を見渡し，その西北側には南海と西海をつなぐ唯一の水道であるウルトモク（鳴梁あるいは鳴洋）があり，その水道を抜けると海南側に全羅右水営がある。李舜臣は，1598年８月16日に攻撃してきた日本水軍をここで迎え撃ち，潮の干満に従って方向を変える強い潮流と地形を巧みに活用し，12隻の軍船で133隻もの日本の大艦隊を破ったのである」と記すが，日付がちがっている。この著書は亀甲船については詳細である。

『日韓歴史共同研究報告書第２分科会篇』（2005）に鄭求福は秀吉軍の２度目の侵攻について，

「名護屋に赴いた沈惟敬らによる講和が決裂すると，1597年１月15日，秀吉は約14万の軍を動員して再度侵攻を試みた。このとき既に明を討つという名分は無くなり，全羅道地域を占領する作戦に代わった。明からも即時に派兵が行われた。日本軍は水軍が敗北したのを始め，朝・明連合軍によって９月５日，稷山戦闘で敗北し戦意を失って海岸地域に後退した。９月10日，鳴梁で李舜臣が日本軍を破った」と，簡単に述べている。日本軍は水軍が敗北したのを始め」というのはいかにも実情と違う。朝鮮水軍が漆川梁海戦で総司令官の元均と全羅右水使・李億祺，忠清道水使・崔湖ら主な武将がそろって戦死し，朝鮮の兵船は裴楔がひきいていた12隻が逃亡したほか，全て日本水軍によって捕獲もしくは焼き討ちにされている。稷山戦闘については前稿で検討したので，ここでは触れない。

李啓煌（2014）は『岩波講座・日本歴史第10巻近世１』において，「朝鮮から見た文禄・慶長の役」の章を執筆した。そこでは鳴梁海戦について，

「全州攻略の後，日本水軍は全羅南道の海岸に沿った道で西進した。これは全羅道攻略を南側から支援するためと考えられる。こうして，８月末から９月初旬頃，日本水軍は会寧浦から船で全羅南道西端の於蘭浦まで進んだ。一方，李舜臣は８月17日に全羅南道の仇末，24日には於蘭浦に着き，９月７日から日本水軍を追撃し始めた。16日には鳴梁に陣を取った。日本水軍は藤堂高虎・加藤嘉明・脇坂安治らが率いる艦船330余艘であったが，大敗した（鳴梁海戦）。この海戦の勝利により朝鮮水軍は南海岸の制海権を取り戻したのみならず，全羅道支配を目指す島津義弘軍への海岸からの支援を遮断した」

日本人歴史家や著述家の筆になるものでもやはり李舜臣の奇跡のような勝利とするものが多い。

藤居信雄（1982）『李舜臣覚書』（p.125）

「李舜臣は13隻の兵船で，せまい水路を思いのまま動いて，自軍よりはるかに多い日本水軍を退け，しかも日軍の長官，藤堂高虎は重傷を負った。（中略）この合戦こそ彼（李舜臣）にとって，これまでのどの合戦より危険な水戦であったが，命つつがなく，奇跡的に勝つことができた」

佐藤和夫（1985）『日本水軍史』（p.393）は，

「朝鮮水軍と対峙，李舜臣は亀甲船を以て，潮流の変化を利用して果敢に日本船団に突入した」と，亀甲船を使ったとする。李舜臣がこの海戦で亀甲船を使ったかどうかは意見の分かれるところである。佐藤も乱中日記を引用して戦闘の様子を描く。日記の末尾は「水勢きわめて険しく勢もまた孤危なり。陣を唐笥島に移す」である。同じ佐藤和夫は10年後の『海と水軍の日本史　下巻』（p.305）で，「ふたたび孤軍奮闘，形勢不利になるおそれがあるので，船団を唐笥島へ移し

た」と意訳している。

前述の北島万次は生涯を文禄・慶長の役，秀吉の朝鮮侵略の研究にささげたといってよいほど，このテーマの著書を多く出版している。日本歴史学会編修日本歴史叢書の中に『豊臣秀吉の朝鮮侵略』（1995）を執筆した。そこでは，

「九月十六日（日本暦十五日）鳴梁の海戦が始まる」として乱中日記・再造藩邦志・高山公実録などから戦闘の経過を記述し，「朝鮮水軍は水路の険と潮流を熟知していることによって勝利を収め，船133艘の日本水軍は敗退の憂き目にあった」と結論している。

北島（2000）「壬辰倭乱における李舜臣の海戦について」『青丘学術論集16号』では，

「激戦の最中，安骨浦の軍営から投降した降倭の俊沙が李舜臣の舟に乗っていた。そして日本軍のひとつをさして“画文紅錦衣を着ている武将は安骨浦陣の日本将来島通総である”と名指しした。ここで来島通総は撃たれ，その首は船首にさらされた。これをきっかけに日本軍は総崩れとなった（乱中日記）」

と述べている。来島通総と名前を出しているが李舜臣の日記の原文では“馬多時”（朝鮮音マタシ）である。この海戦で戦死した日本側の武将と言えば，来島通総であり，古くからこの馬多時は彼であるとされているが，このほか菅達長の息子の又四郎正陰をマタシであるとする説も出されている。「日本軍は総崩れとなった」根拠として，北島は，乱中日記の「賊気大挫」を示している。しかし，これは味方の武将が討たれ，その首が李舜臣の船の船首にさらされたので，日本軍は一時的に怯んで暫くの間近づかなかった，というのではないだろうか。北島はこの論文において，「日本水軍の衝撃」として，「来島通総の戦死は日本水軍に衝撃を与えた。それは日本側の記録にみえている。来島通総戦死のさい，その家老たちの多くも負傷した。軍目付毛利高政は海に落ちたが救出された。海戦は朝から夕方まで続いたが，朝鮮水軍は鳴梁の水路の険と潮流をよく知っていた。このため十三隻の朝鮮水軍は百三十三隻の日本水軍を撃破できたのである」として，その根拠を高山公実録の全文を史料原文として示している。しかし，その史料には朝鮮水軍側が「風をよくみすまして」先に撤収してしまい，日本側が「是非なく追っかけ申す儀もまかりならず」，と追撃できなかったとは述べているが，133隻が撃破された根拠としては薄弱であるように見える。北島訳の乱中日記では，「賊船31隻を撃破した」と言っているが133隻を撃破…」とは言っていない。

北島（2002）『壬辰倭乱と秀吉・島津・李舜臣』でもこの論文に準じ記述し，９月17日，18日，李舜臣一行が鳴梁の北方の於外島，さらに古参島に赴くと地域の民衆，避難していた民衆の船が多くやってきていて，祝意を述べ，多くの食料を水軍のために贈ってくれたという。「鳴梁の大勝に人々が小躍りしている様子が目に浮かぶようだ」と記している。

北島（2002）『日本史リブレット（34）秀吉の朝鮮侵略』（p.88）及び同じく北島（2012）『秀吉の朝鮮侵略と民衆』でも（p.106）同様の記述になっている。

上垣外憲一（1989）『空虚なる出兵－秀吉の文禄・慶長の役』（p.169）

「慶長の役における朝鮮側の反撃の主役をなしたのは，今度も李舜臣だった。慶長２年９月，李舜臣は再び水軍統制使の職に戻って，全羅右水営，半島性南端の珍島の本土に面する北岸，碧波津にあった。元均の敗戦によって李舜臣の手元に残された兵船は僅かに13艘だった。ただその中に亀甲船があったのが救いであった。９月14日，碧波津より西の鳴梁で日本軍との決戦が行われた（中略）この戦いによって日本水軍の西進は挫かれ西海岸の制海権は朝鮮側に保持されるのである」

ここで，13艘中に亀甲船が含まれていたという。同じ著者（2002）の『文禄・慶長の役－空虚なる御陣』でもこの箇所は同一の記述になっている。

片野次雄（1983）『李舜臣と秀吉』（p.226）

「漆川梁の海戦で朝鮮水軍の受けた損害がいかに大きかったかについて触れておこう。二百余艘の船勢であった朝鮮水軍が，たったの12艘に減じてしまったのである。12艘すべてが亀甲船であった。あとは，陸で修理中の中古の板屋船が１艘だけ難をのがれたに過ぎなかった」と述べ，鳴梁海戦では，「12艘の亀甲船は正確無比に，しかも敏速に進退を繰り返して，刻一刻，確実な戦果を挙げていた」（p.235）「亀甲船の射手はただ夢中で弾丸を発射し続け，漕手は必死に櫓を漕ぎ続けた。この舟師たちが意識を取り戻した時，日本水軍は四散していた。」と述べている。

片野次雄（1996）では，これを「十数艘に増えたといわれる亀甲船も，全て海の藻屑と化している」と修正したほか，同様の記述である，「この鳴梁海戦の快勝で，朝鮮水軍は元均が失った全羅道海域の制海権を取り戻し，以後，日本水軍に，西進の野望を完全に放棄させた。つまり，前後二回の戦役の中で，日本水軍が最も西にたどり着いたのが，この鳴梁であったのである」と述べる。

貫井正之（1995）『豊臣政権の海外侵略と朝鮮義兵研究』（p.55）では，

「８月３日，この敗報（漆川梁海戦，巨済島海戦，唐島の戦いの壊滅的敗北）が漢城に届くと，朝鮮政府は李舜臣を釈放し，再び水軍統制使に任命した，彼は即刻，全羅道珍島の右水営に赴き壊滅状態の朝鮮水軍の再建に取り組んだ。９月，再建なかばの舜臣の率いる朝鮮水軍は，藤堂・脇坂・加藤・来島通総などの率いる日本の大船団と全羅道鳴梁海峡で戦った。同海域は南海の中でも潮流の変化の最も激しいところであった。舜臣はその潮流を巧みに利用して，弱体な水軍を奔放に駆使して奇跡的な勝利をおさめた（乱中日記草・実録）」

笠谷・黒田（2000）『秀吉の野望と誤算－文禄・慶長の役と関ケ原合戦－』（p.88-89）

「しかし，李舜臣の戦略の天才性は天賦のものであったことも間違いない。それを示すものとして，慶長の役のときの鳴梁海戦を紹介したい。実は，朝鮮水軍は慶長２年（1597年）７月下旬，元均指揮下の巨済島・漆川梁海戦で秀吉軍に大敗し，160余隻の船と全羅右水使李憶淇ら連戦の勇士をうしなっていた。同年９月16日，鳴梁に秀吉軍330隻を迎えた時は，わずか13隻の状態であった。漆川梁敗戦の直後には，王朝政府は経費のかかる朝鮮水軍の全廃に向けて議論していたという。朝鮮水軍の命運は内外ともに崖っぷちであった。それが，鳴梁では朝鮮水軍側は１隻の船も失わず，反対に秀吉軍は30隻の軍船と来島水軍の総帥来島通総を失ったほか，猛将藤堂高虎も重傷，軍監毛利高政もあわや溺死寸前という完膚無きの状態で，朝鮮南海岸の西進策は脆くも崩れ，熊川に引き上げるはめとなった。」

と決めつけている。藤堂高虎は手に二ケ所疵をうけたと高山公実録に出ているが，「重傷」と判断できるのだろうか。「賊船31隻を撃破」という李舜臣の言い分を全面的に受け止めて31隻が沈められたと言っていいのだろうか。

宇田川武久（2002）『戦国水軍の興亡』（p.229-230）

「九月十六日の早朝，豊臣水軍の諸将は右水営付近を遊弋する王朝水軍を攻撃するために出船した。豊臣水軍は水路の険難をみて，数十艘の中型の関船で作戦を展開した。舜臣は十二艘の軍船で豊臣水軍の多勢を敗走させた。鳴梁の激しい潮流を利用した戦法によった王朝水軍が勝利を得たが，これは舜臣の作戦勝ちであった。鳴梁の海戦で，伊予来島の城主の来島通総が陣没した。」次のページで「李舜臣は宣祖三十年十月九日，右水営に凱旋した」と記述するが，李舜臣と彼の船団は北方の全羅道の北端の島へ往復していたのだ。帰還した時の右水営はどうなっていたかというと，「城の内外に人家はまったくなく，また人影もない。見るも無惨な有様である」と日記（乱中日記３巻p.60）に記している。日本水軍の襲撃によって廃墟と化していたのだ。もし李舜臣らが九月十六日にここ右水営に踏みとどまっていたとしたら，守り切れたであろうか。あくまで日本水軍を撃退できたのであろうか。

中野　等（2008）『日本の戦史16文禄・慶長の役』では，

「双方の水軍は，９月16日（日明同暦）に鳴梁海峡で衝突し，朝鮮水軍が勝利する。この海戦で来島通総が戦死，戦目付として従っていた毛利友重も危うく水死するところであった。戦いののち，大敗を喫した日本の船手衆は熊川まで後退し，これによって船手が西方へ展開するという作戦は頓挫する」となっている。

小和田哲男指導・竹内正浩執筆（2008）『週刊・新説　戦乱の日本史22朝鮮出兵』では，

「朝鮮半島南東部の慶尚道沿岸海域が主戦場となった文禄の役と異なり，慶長の役では，南西部の全羅道一帯が激しい攻防の舞台となった。鳴梁海戦では地の利を生かし，軍船を多数沈めるとともに指揮官の藤堂高虎を負傷させ，来島通総を戦死させている。しかし，朝鮮水軍の軍船不足はいかんともしがたく，李舜臣はいったん全羅道北端付近まで撤退し，捲土重来を期すこととなった。」（p.18）

関　周一（2017）『日朝関係史』（p.125）では，

「同月李舜臣は13隻の兵船をもって，133隻の兵船を擁する藤堂高虎・加藤嘉明・脇坂安治らの水軍を全羅道珍島の鳴梁海峡で撃破した。李舜臣は鳴梁海峡の西側に，漁船を兵船に偽装して布陣し，そこに東から攻めてくる日本軍を誘い込んだ。」とする。

藤井譲治（2020）『天下人秀吉の時代』（p.305）では，

「いっぽう全羅道の南海域では，当初日本水軍優位に展開するが，その後は李舜臣率いる朝鮮水軍に大敗を喫し，海上からの全羅道攻略は頓挫する」となっている。

山内　譲（2016）『豊臣水軍興亡史』（p.212）にこの海戦に軍目付として加わっていた毛利友重（高政）の子孫の家，豊後佐伯藩毛利家に伝わる９月18日の注進状を紹介している。藤堂・脇坂・加藤・菅らが連名で増田長盛・石田三成らの奉行にあてた書状だ。

「風が吹く時分だったので，大船は河口に残し置いて，小関舟ばかりで十日に打ち立ち，赤国浦々島々に発向したこと，たいたんむろの向かいの“水営”という瀬戸口に敵番船・大船が14艘，そのほか小舟が数百艘船懸りしていたので，十六日に押しかけ，卯の刻より申の刻まで戦ったこと，毛利民部大輔（友重）の舟一艘と藤堂家の家中の舟一艘が敵舟に付けて「切り乗り」，戦いの際ちゅうに友重は二か所疵を受けて海中に落下し，藤堂の舟に助けられたこと，申の刻まで戦い，討ち果たそうと考えていたとき，大風が吹き出し，敵番船は“案内者”であったので逃げ退き，六，七里ばかり追いかけたが，日が暮れ，そのうえ地理に不案内だったので，敵番船の小舟数艘を“焼き割る”にとどまったことが記されている」という。この文中の「敵の小舟」というのは李舜臣が避難民の舟に幟や旗を立てさせた偽装兵船なのであろうか。この九月十八日船手衆注進状にはこのほか，海戦の翌日，17日に，「彼番舟の有所早舟を以て方々浦々雖相尋申候，近辺ニ相見不申候」と，近辺の海域を捜索したが敵船を見つけられなかったことが記されている。日本側の高山公実録の「みなとのやうす，はん船能存候に付，風を能見すまし，其せと口をぬけ，ほをひきかけ，はしらせ申につきて，是非なくおつかけ申儀もまかりならず，」の通り，朝鮮水軍は地形と海流を熟知していて，風をみて帆を張って素早く鳴梁を撤収してしまった。日本側としては追撃できなく取り逃がした，ということであろう。乱中日記の「勢亦孤危」とは「衆寡敵せず」，多勢に無勢できわめて不利である，という認識ではないのかと思う。

小川　雄（2020）『水軍と海賊の戦国史』（p.168）は，

「日本水軍は鳴梁海戦で苦戦したものの，敗走したわけではなく，最終的に後退したのは朝鮮水軍であった。巨済島海戦（漆川梁海戦）で大敗した結果，朝鮮水軍が鳴梁海戦に投入できた兵力は板屋船十余艘にとどまった。そのため，安宅舟を欠くとしても，130艘もの兵力を有する日本水軍の数的優位に抗しきれなかったのである。もともと，日本水軍の目的は，全羅道の制圧作戦の一環として，同地域における朝鮮水軍の拠点を掃討することにあった。そして，朝鮮水軍は全羅道南西岸の鳴梁で日本水軍に痛撃（村上通総の戦死）を与えつつも，圧倒的な物量差を覆すには至らず，北方に退却せざるをえなかった。これにより，慶尚道・全羅道の南部海岸は，ほぼ日本側の制圧下に置かれることになった。文禄の役で，日本水軍は日本水軍の対処法を見出した後も，釜山や巨済島の周辺を確保するにとどまったが，慶長の役では，はるかに広大な地域を制圧したのである。対外戦争に応じた水軍編成の変革が相応の成果を収めたといえよう。」

日韓の多くの文献が，「日本水軍が敗走，西進の勢いを挫かれ，熊川へ撤退した。朝鮮水軍が制海権を回復した」とするのに，正反対の結論を述べていることになる。

英文のwikipedia，Battle of Myeongnyangでは，「朝鮮水軍の決定的勝利」としている。日本軍に九鬼義隆を入れているが，彼はこの海戦に参加していない。興味深いことに，（2021・８・22閲覧）

「日本艦隊の司令官である藤堂高虎の公式記録にこの戦いを決定的な敗北として次のように要約した。」として，上記の「高山公実録」の全文を表示し，その英訳を示しているが，とんでもない誤訳をしている。

「みなとのやうすはん船能存候に付風を能見すまし 其せと口をめけほをひきかけはしらせ申について是非なくおつかけ申儀もまかいならす」を英文では，

. We ran out of the narrow sea hoisting a sail. Because of that fact, the enemy's ships could not chase us.

いち早く逃走したのが日本側である，という英文になっている。ここを日本側の決定的敗北の根拠にしているのだ。もう一か所，面白いのは「1597年11月23日，陰暦10月14日，日本軍は報復のため，懲罰的な遠征隊を李舜臣の住居のある牙山に派遣した。村を焼き李舜臣の末の息子ミョン（薤）を殺害した。」という記述だ。本当は日本の陸上部隊が牙山を襲撃しそれを迎え打ったミョンが戦死したのであって，日本側は李舜臣の住居のある村を優先的に襲撃したとか，李舜臣の息子と知って狙い殺したというわけではないだろう。

さて，英文wikipediaでさらに注目すべきことに，「李舜臣は輝かしい勝利のあとも，いまだ残存日本水軍との圧倒的数的劣勢のゆえに，補給のため，そして広いスペースでの機動性のある防衛のため，黄海へと撤収した。日本水軍は北方の全羅道西岸の霊光郡の島々付近の海域へと侵攻した」ことが付記されている。

前述の上垣外（1989，および2002）は「日本水軍の西進は挫かれ，西海岸の制海権は朝鮮側に保持された」と結論しているが，その４ページ手前で，朝鮮の儒者姜沆が藤堂の軍勢に捕らえられる場面を解説している。「20日になって，全羅道南西端にあった水軍統

制使が，日本の兵船千余艘が迫ったため，“衆寡敵せず”ということで，西海岸を北上していったという話を聞いた。姜沆はこの李舜臣の軍に合流しようとして，船を進めようとするが，９月23日，霊光郡の沖合で日本船に遭遇する。藤堂高虎の軍の兵船だった」と記している。同じ著書の「日本水軍の西進は挫かれ西海岸の制海権は朝鮮側に保持されるのである」とする記述と矛盾をしているのに気づかないのだろうか（注１）。捕らえられた姜沆の『看羊録』によれば，「24日，務安県の一海島（落島という）についた。そこには，賊船が数千艘も海港に充満し，紅白の旗が日に照り輝いていた」と述べている。１艘や２艘の日本の船が偵察に来ていたわけでなく，水軍の主力がここまで侵攻して来て居たことになる。「一人の賊が，通訳を引き連れて来て，問いかける。“水路の大将（李舜臣）は今どこにいるのか”」と問いただしたことにも触れている。当然ながら日本水軍は李舜臣を追跡してきたのだ。

また，姜沆と同じように，鄭希得も家族とともに全羅道西岸を避難している途中で捕えられた両班である。彼は９月27日，蜂須賀家政の部将森小七郎の船に遭遇した。同行していた母・妻・兄嫁・妹の４人は倭人に辱めを受けるのを恐れて，倭船が接近してくると，海中に身を投じたという。老父と幼い息子は一緒に捕らえられたが，老・幼の故をもって釈放されたことなど『月峰海上録』に書き残している。

Ⅲ・結論

韓国および日本の文献を見たところ，鳴梁海戦は李舜臣の大勝利であり，日本水軍は鳴梁から撃退されたとするものが多い。しかし，実際は日本水軍の先鋒に痛打を与えた朝鮮水軍は後続の日本水軍に抗しえず，主力船の温存のため，全羅道北端の古群山島まで撤退したことが乱中日記から明らかであり，全羅道西岸を守備できなかったのは事実である。また，姜沆と鄭希得が夥しい日本水軍を目撃し捕虜になったのは全羅道霊光郡の沖合であった。したがって日本水軍は鳴梁で撃退されず，全羅道西岸へ侵攻したことが明らかだ。朝鮮水軍は制海権を保持したとも言えない。日本語wikipediaが記述するとおり，この海戦の結果は「朝鮮水軍は日本水軍の先鋒に局部的勝利をしたが，大局的には日本水軍が戦略的勝利をした」といってよいのではないだろうか。

（注１）北島万次『豊臣秀吉の朝鮮侵略』においても，この戦役で捕虜となった朝鮮人たちのことを述べたところで，「一般庶民と違い，朱子学者姜沆・鄭希得の場合，はっきり言って，彼らはエリートの待遇を受け，やがて帰国がかなった」とのみ記述されている。捕虜になった日時や場所は記していないため，読者は二人を鳴梁海戦と関連づけて読み取ることができないようになっている。

文献等

イ・インソクほか（2013）『世界の教科書シリーズ（39）検定版・韓国の歴史教科書「高等学校韓国史」』明石書店

小川隆章（2021）「文禄・慶長の役における稷山の戦いに関する韓国歴史教科書の記述の誤りについて」環太平洋大学紀要18号，p.207-213.

小川　雄（2020）『水軍と海賊の戦国史』平凡社

笠谷和比古・黒田慶一（2000）『秀吉の野望と誤算　文禄慶長の役と関ケ原合戦』文英堂

上垣外憲一（1989）『空虚なる出兵－秀吉の文禄・慶長の役』福武書店

上垣外憲一（2002）『文禄・慶長の役　空虚なる御陣』講談社学術文庫

韓国教育部編（2003）『世界の教科書シリーズ１新版・韓国の歴史「国定韓国高等学校歴史教科書」』明石書店

北島万次（1995）『豊臣秀吉の朝鮮侵略』吉川弘文館

北島万次（2000）「壬辰倭乱における李舜臣の海戦について」『青丘学術論集16号』p.5-61.

北島万次（2001）「文禄・慶長の役」日本歴史大事典３　小学館　p.620-623.

北島万次（2001）「文禄・慶長の役」『国史大辞典12』吉川弘文館　p.429-432.

北島万次（2002）『日本史リブレット　秀吉の朝鮮侵略』山川出版社

北島万次（2002）『壬辰倭乱と秀吉・島津・李舜臣』校倉書房

北島万次（2012）『秀吉の朝鮮侵略と民衆』岩波書店

北島万次（2017）『豊臣秀吉朝鮮侵略関係資料集成３』平凡社

姜沆（朴鐘鳴・訳）（1984）『看羊録・朝鮮儒者の日本抑留記』平凡社東洋文庫

金熙明（1972）『日本の三大朝鮮侵略史－倭寇・壬辰倭乱・日韓併合と総督政治』洋々社

参謀本部・編（1924）『日本戦史・朝鮮役』村田書店
関　周一（編著）（2017）『日朝関係史』吉川弘文館
宋讃燮・洪淳権（藤井正昭・訳）（2004）『世界の教科書シリーズ⑨概説・韓国の歴史　韓国放送通信大学校歴史教科書』明石書店
朝鮮史編修会（1937）『朝鮮史　第四編第十巻』朝鮮総督府
鄭求福（2005）「壬辰倭乱の歴史的意味－壬辰倭乱に対する韓・日両国の歴史意識－」日韓歴史共同研究委員会『日韓歴史共同研究報告書第２分科篇』p.493-512.
鄭希得（若松　實・訳）（1992）『月峰海上録』日朝協会愛知県連合会
徳富猪一郎（蘇峰）（1964）『近世日本国民史９朝鮮役下巻』時事通信社出版局
中野　等（2008）『戦争の日本史16　文禄・慶長の役』吉川弘文館
藤居信雄（1982）『李舜臣覚書』古川書房
藤井譲治（2020）『天下人秀吉の時代』敬文舎
矢沢康祐（2014）「壬辰・丁酉倭乱」伊藤亜人ほか監修『新版・韓国・朝鮮を知る事典』平凡社　p.264-267.
山内　譲（2014）「来島村上氏と文禄・慶長の役」松山大学論集第24巻４－２号，p.497-519.
山内　譲（2016）『豊臣水軍興亡史』吉川弘文館
李ヒョンソク（1977）『壬辰戦乱史（上・中・下巻）』東洋図書出版
李啓煌（2014）「朝鮮から見た文禄・慶長の役」大津　透ほか編『日本歴史第10巻近世１』岩波書店　p.100-134.
李舜臣（若松　實・訳）（1991）『乱中日記』日朝協会愛知県連合会
李舜臣（北島万次・訳）（2001）『乱中日記３－壬辰倭乱の記録』平凡社東洋文庫
李敏雄（2004）「丁酉再乱期における漆川梁海戦の背景と主要経過」黒田慶一・編『韓国の倭城と壬辰倭乱』岩田書店　p.395-429.
柳成龍（朴鐘鳴・訳注）（1979）『懲毖録』平凡社